



原正秋 人と文学

武田勝彦編著

創林社

立原正秋 人と文学

一九八一年七月二〇日第一版第一刷発行
一九八一年一〇月五日第一版第三刷発行

定価 一六〇〇円

編著者 武田 勝彦

発行者 宮西 忠正

発行所 (株)創林 社

〒101 東京都千代田区三崎町二の二の二

電話東京(〇三)二六五―八〇七七

振替東京〇―二六五四五

須藤印刷 大口製本

©KATHUHIKO TAKEDA

0095-0130-4281

目

次

I 人と文学

- 立原正秋・二題……………井上 靖 九
「他人の自由」から「帰路」までの交際……………吉行淳之介 四
兄 貴 格……………小川 国夫 三
早稲田文学のころ……………三浦 哲郎 元

II 作品論

- 「剣ヶ崎」——断念と美意識……………大原 泰恵 三
「白い罌粟」——論理と狂気……………大原 泰恵 三

「美しい城」論	武田 勝彦 兎
「冬の旅」	長谷川 泉 蝸
「夏の光」論	桶谷 秀昭 蝸
「夢は枯野を」	武田 勝彦 一兎
「きぬた」論	武田 勝彦 三兎
「冬のかたみに」	吉田 精一 一兎
「たびびと」	武田 勝彦 一兎
「山水図」の位置づけ	大原 泰恵 一兎
「帰 路」	武田 勝彦 一兎

Ⅲ 著作目録

鈴木 靖子 二〇五

あとがき……………二〇五

立原正秋 人と文学

I
人と文学

立原正秋・二題

井上靖

立原正秋に「風」という詩がある。昭和四十六年十一月の作である。

——身 閑しづかならんと欲すれど風かぜ熄やまず

いづこより吹きくるか

東の海より北の山脈よりわが心の斜面より吹きくるか

またの日 まちを歩みて風にであひぬ

喧噪の彼方 人影虚しく

独り歩まんと欲すれど風熄やまず

またの日の夕は

居酒屋にたちより心を縦にしほしいまま

牡蠣にレモンを滴らせてくらふ

酒 はらわたにしみれど

風 脳髓を吹き荒る

げにやかかる日の夕は

木刀にて空を斬れど

風熄まず

立原正秋らしい詩である。私は彼とは酒場以外のところでは殆ど顔を合せていない。酒場で会ったと言っても、数回を出ないだろう。しかも、いつも席を隔てての会い方である。人懐なつこさと、人を拒否するものと、優しさと、烈しさと、反対のものを併せ持っている立原には、馴れ馴れしく人を近寄せぬところがあつた。

こんど「風」という詩を読んで、なるほど彼にはいつも「身 閑かならんと欲すれど風熄まず」というところがあつたのだなと思つた。この詩を彼の生前に読んでいたら、私は立原正秋の前に坐つて、黙つて酒を飲み合える間柄になつていたのではないかと思われて、残念である。

こんど立原正秋の初期の短篇を集めている『美しい村』を読んだ。「乾いた土地」、「聖クララ村」、「美しい村」、それぞれ面白かったが、なかでも「美しい村」が光っていた。自然の風物と人の心しか書いていない作品で、それがこの作品を極度の純粹なものにしていた。昭和三十八年の作品であるが、若くしてこのようなものを書いていたら、あとを書いてゆくのが大変だったろう、そんなことを思わせられる作品である。大抵の作家が終着点で意図するような作品を、彼は若くして書いてしまっているのである。

しかし、この短篇集『美しい村』で、最も大切なのは巻頭に収められている「八月の午後」という十枚ほどの短篇というか、掌篇というか、ごく短いものである。

——八月の午後に、主人公の周子は歯医者からの帰りの道で、数年前に一年間だけフランス語を習いに行っていた「川辺のおばあさま」なる老婆に会う。そして彼女が持っている氷の包みを替って持ってやって、坂を登り、彼女の住居である赤煉瓦の二階建ての洋館まで送ってやる。そしてすめられて家に上がり、つめたい紅茶と、彼女が昨日焼いたケーキをごちそうになる。彼女がフランス語を習いに通っていた頃、この邸には婚期を逸した二人の娘と、京都の大学に勤めていた息子がいたことを思い出し、よほど三人の子供たちのその後の消息を訊こうかと思つたが、それをやめて、その家を辞す。そして周子は、あの薄化粧をほどこした顔と端麗な歩き方、洗練された洋服の

趣味は、もう六十五は過ぎてゐる筈だが、とてもそんな年には見えないと、そんなことを考えながら坂を降りる。そして休暇に入ってひっそりしている小学校の庭の横を通り、川添いの道に出る。真上から照りつける太陽で、顔からも体からも汗がふき出している。その時、周子は親しい道子という娘から声をかけられ、川辺のおばあさまのところへ行つていたことを話すと、道子は、あなた、なにか間違ひじゃないの、あのおばあさまは去年お亡くなりになつたのよ、そしてあそこの二人の娘さんはいまわたしの家の近くに住んでおり、あの家はいま売りに出ているのよ、と言う。

そしてこの短篇は、

——それから周子は道子に腕を抱えられて自宅にもどりながら、そんなはずはない、わたしはたつたいま、あの老婆と紅茶を飲み、ケーキをつまみ、はなしをしてきたのだとおもつた。

という文章で終つてゐる。

なかなかしゃれた短篇で、このあり得べからざるふしぎな挿話からの、作者の引き上げ方もみごとであり、あざやかである。

童話にでもありそうな怪談めいたおはなしであるが、この短篇を読み終つた時、怪しさも感じられないし、なあんだという拍子ぬけした気持ちにもならない。むしろ読んだ者は、自分が人生に對かつて立たされてゐるのを感じる。人生もまたこのようなものであるかも知れないし、また人生というものには、このようなことがいっぱい詰まつてゐるかも知れない、そんなことを思わせられる。そういうところはみごとである。そうざらにはない傑作の一つであらうと思う。

作家立原正秋を理解する上では大切な、あるいは一番大切な作品であるかも知れない。敢てそう

言わせるものをこの作品は持っている。その一番大切な作品を、立原は文学者としての初期に書いてしまっているのである。ここで、私はもう一度思う。立原正秋には度々会って、親しく語るべきであったのである。しかし、立原正秋は言うかも知れない。それが人生というものですよ、人生には確かなものなんて、何一つないんですからね、と。

「他人の自由」から「帰路」までの交際

吉行 淳之介

現在「他人の自由」という書物に収められている立原正秋の短篇を、愛読したことを思い出す。昭和三十年代前半のことと覚えているが、「近代文学」その他に載る彼の短篇を、かなり積極的に見付けて読み、おもしろくおもった。どういふ人かも知らず、年齢は私より大分下だろう、と勝手に考えていた。これらの短篇には、虚無の風が吹き抜けており、余分の理屈はなく、そこがとてもよかった。

昭和三十六年くらいだったか、その立原正秋に「群像」編集部で偶然会って、紹介された。そのときは、ほんの少し話をしただけだった。

立原正秋の名がジャーナリズムにはつきりと出たのは、三十年代末の「剣ヶ崎」である。その出自によって悩む男を主人公にしたもので、こういうテーマは本人にとっては切実で痛切なものだと